



# 双塔

カトリック新潟教会

2018年8月  
No. 363

## イエスと隣人（一）

協力司祭 鎌田耕一郎

（イエスと婦人）モーゼの律法も、律法の師であるラビたちも、婦人に対してあまり親切であったとは言い難い。次のようなラビの言葉にもそれが表れている。

「全能の神は、男のどの部分から女を造ろうかと考えた。頭からか、女はひどく高慢になるだろう。目からか、女はひどく物見高くなるであろう。耳からか、女は扉のうしろで盗み聞きするであろう。口からか、女はしゃべりすぎるであろう。手からか、女は浪費するであろう。ついに女が謙虚であることを希望して、見えないかくされた体の一部を取った・・・」

しかし、イエスはそうではなかったし、婦人を避けられなかった。イエスは、苦痛を忍んで子を産む母親（ヨハネ 16・21）、臼をひき（マタイ 24・41）、パンをつくり（同 13・33）、衣服を繕い（同 9・16）、働く婦人たちの苦労を知っておられたし、また、ベタニアのマルタの優しい心づかいや、妹マリアの観想的な魂を称賛された（ルカ 10・38 以下）。その公生活を助けた婦人たち（ルカ 8・2）の犠牲的な協力を受け入れ、カルワリオの丘まで従った婦人たち（ヨハネ 19・25）の強さと誠実な愛を喜ばれたにちがいない。

また、熱病で伏していたペトロの義理の母（マタイ 8・14）、イエスの衣に触れた血漏の女（マルコ 5・25）、かがんだまま立つことの出来なかった女（ルカ 13・11）など病める婦人に親切であったし、三つのよみがえりの奇跡には、その母や姉妹の歎きに対する憐れみが含まれている。そしてその憐れみはサマリアの女（ヨハネ 4・1 以下）や罪の女（ヨハネ 8・3 以下）にまで及ぶのである。婦人を尊び、その地位を高めたことは、キリストの教えの見逃すことの出来ぬ重要な点である。

（イエスと子供）イエスはすべての人々を愛したが、とりわけ子供を愛されたことが聖書にあらわれている。子供たちが結婚式や葬式ごっこをしているのを観察したり（マタイ 11・16）、てんかんでひきつけているのを癒したり（ルカ 9・37）、祝福の按手（マタイ 19・15）だけではなく、「子供のよう  
に神の国を受けないと、そこには入れない」（ルカ 18・17）といわれたのである。おそらく成人した男子のみが完全な人間であるという、古代世界の確信を持っていた弟子たちは、とまどったに違いない（パンの増加の奇跡では婦人と子供は数から除かれている—マタイ 14・21、15・38）。

子供は、その純真な無邪気さの中に、神の似姿を映し出している。子供は人間として成長するために、誰かを頼りにする必要がある、子供の澄んだ目には深い信頼が輝いている。また、子供の目は対象にまっすぐに向けられ、そこに徹底した対象への没入がある。

イエスの教えは秘義を含み、教えの意味するところを完全に知り尽くすことはあり得ない。それ故に、理性的な明晰さのみが必要なのではなく、むしろ子供の信頼と曇りのない単純な目が必要であることをイエスは教えられたのである。

このことを最も深く理解したのは「この道は、父親の腕に抱かれて、何の心配もなく眠る幼子の信頼の道です」（小さき花）と、神への全き信頼と委託である「幼子の道」を説いた幼きイエスの聖テレジアであろう。

## そよかせ便り

### ■ 米沢の殉教者列福 10 周年記念行事 ----- 7 月 1 日 (日) 11 : 00 -----

福者ルイス甘糟右衛門と 52 名の同志殉教者を含む「福者ペトロ岐部と 187 殉教者」が列福されて今年で 10 年となる。その典礼上の記念日となる 7 月 1 日、米沢・北山原で「列福 10 周年感謝ミサ」が行われた。

日曜日であるので、本来は年間第 13 主日のミサがささげられるはずであるが、新潟教区にとって大切な福者の記念日ということで、教区管理者・菊地大司教様の許可のもと、殉教者固有のミサとしてささげられた、また、当初は菊地大司教様が司式される予定だったが、大阪教区の前田万葉枢機卿様の枢機卿親任式（ローマ）などへの出席のためにそれがかなわず、ミサは教区管理者代理の大瀧神父様によって捧げられた。

ミサに先立ち、米沢教会ではこの日のために 53 本の十字架が用意されていた。殉教者の構成に合わせて、大人用と子ども用が用意され、それを巡礼団が北山原まで約 2km の道のりを携えて徒歩で巡礼した。北山原に着くと祭壇奥の十字架像の周りにしつらえられた場所に立てられ、ミサが始まった。

猛暑の中での野外ミサとなり、ミサ後は冷たい麦茶がふるまわれ、散会した。

### ■ 侍者勉強会 ----- 7 月 7 日 (土) 17 : 30 -----

例年より早く梅雨明けした中、聖堂にて侍者の勉強会を行った。まずは復活祭、クリスマス等の一大行事の入祭の立ち位置の確認と祭器の取り扱い方についてラウル神父様から指導を受けた。冒頭、特にメモしなくてもいいよとラウル神父様からのお言葉で少し気楽に受け止めたものの、香と舟を使用する際の立ち位置、持ち方については司式内容により 3 パターン、更に司式司祭の利き腕によっては、立ち位置は変わるなど確かにメモするよりは体で覚えなければならない内容であった・・・。

勉強会後は、ロレンゾ神父様を交えセンター 2 F の和室にて懇親会を行った。ラウル神父様お手製のパスタをメインディッシュに、メキシコ料理のアボガドのグアカモーレやピコ・デ・ガヨをクラッカーにのせ、ビールと一緒に美味しくいただいた。W 杯のメキシコと日本のベスト 16 で歓喜に沸いた話から小学生時代の侍者の話、懐かしい三森神父様のことと、あっという間に 3 時間が経過していた。宴の後は連係プレーで素早く後片付けをし、皆でアイスクリームを頂いた。勉強会、懇親会共に充実したものであった。

---

**カトリック新潟教会 月刊「双塔」** 毎月 1 回 最終日曜日発行 編集・発行/カトリック新潟教会 小教区評議会 広報部

〒951-8106 新潟市中央区東大畑町通一番町656 TEL:025-222-5024 FAX:025-222-5054